

「近衛家陽明文庫 王朝和歌文化一千年の伝承」開催について 名和 修（財団法人陽明文庫 理事 文庫長）

去る5月13日に行われた国文学研究資料館の運営会議に於いて、平成23年度の催し物の一つとして、特別展示「近衛家陽明文庫 王朝和歌文化一千年の伝承」を10月8日より国文学研究資料館展示室に於いて行うことが報告された。国文学研究資料館とは深く永いご縁の陽明文庫の資料が、その展示室で大々的に展示公開される時がようやく到来したかの感がある。陽明文庫の国文学研究資料館とのお付合は昭和50年に始まる。即ち同館の根幹事業である国文学関係資料の調査及びマイクロフィルムによる収集ということで、先ず50年に伊勢物語・古今和歌集など約140点の調査、翌51年にはそのマイクロ撮影及び源氏物語など約250点の調査がなされた。以来35年間1年たりとも欠くことなく調査収集は続けられ平成22年度までで9,219点、フィルムにして917リール約48万コマの収集がなされたのである。だがこれで完了した訳ではなく、まだいつ終わるともなく陽明文庫での調査収集は続けられる。これはとりも直さず陽明文庫には如何に国文学関係の資料が豊富に収蔵されているかということを示していると云えよう。

今更説明するにも及ばないだろうが、陽明文庫とは近衛家という、我が国の歴史に匹敵すると云っても過言でない、永い歴史を持つ家に伝え遺されてきた、膨大な資料を保存管理している文庫である。そもそも近衛家とは五摂家筆頭の家柄といわれる。大織冠鎌足以来代々栄え、平安中期には藤原道長によって代表される如くその全盛を見た藤原北家の嫡流宗家、歴代が摂政や関白職に就くので摂関家と呼ばれ、のちそれが五家に分かれるが、その際嫡男の流れをその邸宅の名をもって近衛家と称する。ちなみに陽明の名は近衛家のもう一つの呼び名であり、陽明家とも称せられるのである。近衛家の各歴代は朝廷に於いて常に重職にあり、儀式典礼を中心とした朝儀にたずさわり、これを指導的立場から維持存続させてゆくためには、必然的に多くの記録や文書を造り且つ伝え遺さねばならなかった。一方近衛家歴代には代々好学の士が多く、詩に文に、物語に和歌に、あるいは連歌にと勉学相励み、自ら作品を遺し、又他家の書を写し、善本を蒐集するなどして、その蔵書は代を重ねるに従い弥が上にも増大の一途をたどった。一方近衛家ではこれらの資料を護り伝え遺すため、例えばかの応仁の乱に際しては代々の記録等の函50合を洛北岩倉の実相院へ引き移し戦火を通れるなど、時代々々に並々ならぬ努力がなされ

てきた。結果今日、国宝8件、重要文化財60件を含む10数万点に垂とする資料がこの文庫に納められている。

これらの資料の一般社会に対する文化的貢献としての展示公開事業は、京都の陽明文庫施設内での小規模の展示の外、全国各地でいわゆる陽明文庫展を開催している。北はこの5・6月開催の青森県弘前市から南は熊本市まで、こゝ約40年で大規模中規模合わせて24個所を数える。これらはテーマやタイトルの違いこそあれ謂わば名宝展的な、即ち陽明文庫の代表的な文化財を種々のジャンルに互って網羅的に、また時には観覧者の趣向に応えるべく展示効果狙いの資料選択などあるとしても、概ね一定のモデルに即した展示構成によるものであった。

それに対して今回の国文学研究資料館での陽明文庫展はいささか趣を異にする。一つには、今回の展示は国文学研究資料館の性格上当然ながら、少なくとも国文学に何らかの関連ある資料に限られるということ。更には展示がそれ自体独立した企画事業ではなく、一定の学術研究の成果としての展示であるということ。このために国文学研究資料館では平成21年度より特定研究「陽明文庫における歌合資料の総合的研究」というプロジェクトを同館の中村康夫教授をチーフとして立ち挙げ、今年度3年目を迎える。このプロジェクトの内容については国文学研究資料館の「国文研ニュース」No. 21の研究ノートに詳しく紹介されているのでそれに譲るが、この2年間各スタッフの陽明文庫に於る実地調査、或は合同研究発表及び討論と実績を積み重ねている。研究テーマにある歌合については、陽明文庫には国宝十卷本歌合巻第六・国宝類聚歌合など歌合関連資料が非常に豊富であるところから選ばれたものであるが、研究内容は単に歌合に留まらず、広く和歌全体に視野を拡げ、まさしく総合的研究の結果、和歌文学資料の創生から継承と云った、超時代的展望のもとに数多くの重要資料をそれぞれ各分野の専門スタッフによって詳細調査研究がなされた。

このような大規模の調査研究が一収蔵庫において可能であるのは陽明文庫ならではの云うべきで、この研究成果に基づいて繰り広げられる今回の特別展示「近衛家陽明文庫 王朝和歌文化一千年の伝承」は斯界学者研究者はもとより、多くの一般好事家の方々の期待に違わぬものとなることを確信している。

「近衛家陽明文庫 王朝和歌文化一千年の伝承」見どころ

中村 健太郎（国文学研究資料館機関研究員）

当館で開催される特別展示「近衛家陽明文庫 王朝和歌文化一千年の伝承」では、陽明文庫に収蔵されている近衛家伝来の品の中から、王朝和歌文化に関連する資料が多数出品される。特に本展は、特定研究「陽明文庫における歌合資料の総合的研究」（研究代表者：中村康夫教授）の成果として、平安時代に編纂された歌合の記録『類聚歌合（二十卷本歌合）』の展示に先ずは注目して頂きたい。

『類聚歌合（二十卷本歌合）』

この『類聚歌合（二十卷本歌合）』は、平安時代の歌合研究において、重要な資料として広く研究者間では知られている。しかしながら、その分量の多さと、複雑な書写形態や、膨大な先行研究の蓄積などにより、容易に調査することが困難な資料としての側面も併せ持っている。本特別展示では、この『類聚歌合（二十卷本歌合）』について、最新の研究成果が提示できるよう、図録の刊行とともに展示計画を進めている。

そもそも歌合とは、左右二つのグループに分かれて和歌を読み合い、それぞれの優劣を判定するものである。平安時代には『天徳内裏歌合』など、天皇の御前で開催された盛大なものもあり、優美で贅を尽した様子が記録に残されている。こうした歌合の数々を、平安時代に編纂したものが、『類聚歌合（二十卷本歌合）』である。本来は全20巻の卷子本の形態で編纂が進められたものの、その後、清書本が作られた形跡は確認できず、何らかの理由により草稿段階のまま編纂が中止され、一括して保管されたものと考えられている。そのため、本文の随所に訂正や切り継ぎの跡を確認することができ、当時の編纂作業の様子を伝えている。また、筆跡も複数の人物によるもので、それぞれ書風の違いを見比べてみるのも興味深い。

『類聚歌合（二十卷本歌合）』のなかには、江戸時代に一部が流出し、古筆切として数行から数十行の断簡に切断分割されたものも多い。伝藤原忠家筆「柏木切」や伝藤原俊忠筆「二条切」などと呼ばれている名物切が、まさにこの『類聚歌合（二十卷本歌合）』の断簡であり、一部は伝西行筆とも鑑定され、鑑賞されてきた歴史がある。

いずれにしても、今日の研究ではすべて伝称筆者として、真の筆者とは認められないものの、名物切として尊重されてきた歴史に変わりはない。それらの断簡も本来は、現在陽明文庫にまとまって伝存する『類聚歌合（二十卷本歌合）』の一部であったと考えられる。古筆切として流出した経緯などを推測する上でも、陽明文庫にまとまって伝存する意義は大きい。現在、陽明文庫で所蔵する『類聚歌合（二十卷本歌合）』のうち、一括で保管された19巻が国宝に指定され、別置分の一部が重要文化財に指定されている。

『十卷本歌合』

陽明文庫には『類聚歌合（二十卷本歌合）』のほかに、もうひとつ平安時代に書写された歌合が伝えられている。『類聚歌合（二十卷本歌合）』よりも書写年代が古く、平安時代中期に編纂され、全10巻の規模であったことから『十卷本歌合』の名称が付されている。特に注目されるのは、流麗な仮名の筆跡にある。この『十卷本歌合』も、一部が江戸時代に古筆切として切断分割され、各所に断簡などが伝存している。江戸時代の鑑定では、不思議なことに宗尊親王（1242—1274、後嵯峨天皇皇子、鎌倉幕府6代将軍）の筆跡とされ珍重された。しかしながら、今日の研究では明らかに平安時代の書写であることが確認されている。平安時代の歌合研究の資料として、『類聚歌合（二十卷本歌合）』とともに重要なものである。

『御堂関白記』

近衛家の先祖にあたる藤原道長（966—1028）自筆の日記である。陽明文庫蔵の自筆本『御堂関白記』は国宝に指定されており、近衛家第一の什宝として今日に伝えられたものである。具注暦の行間にその日の記事を書き付け、記事が多く表面に書ききれない場合は裏面にも日記を書き付けている。江戸時代の近衛家では、自筆本の『御堂関白記』は一般に公開してはならず、近世の転写本が実際の利用に供されていた。本展示では、自筆本とともに、こうした転写本との比較ができるよう展示計画を進めている。

『和漢抄』 下巻

平安時代に書写された『和漢朗詠集』の下巻。本来は上巻と一具で制作されたものと推測されるが、現在は下巻の「鶴」から「白」題までを残し、2巻の卷子装に改装されている。巻末に「和漢抄 下巻」と記載されていることから、『和漢抄』と呼ばれ、また『近衛本和漢朗詠集』の別称もある。平安時代に日本へ舶載された唐紙を料紙として本文を書写している。唐紙とは紙面に胡粉を引き、雲母を用いて版木で文様を刷り出した料紙を指す。唐紙は当時最高級の書写料紙として珍重されたことが知られる。平安時代の筆跡の資料としての他に、貴重な唐紙の遺例としても重要な資料となっている。こうした美しい典籍は、平安時代の貴族間で贈答用の調度手本として、当時の能書が執筆している。

『大手鑑』

奈良時代から室町時代までの天皇や公卿、高僧などの著名な人物の筆跡を収集し、上下2帖に貼り込んだ古筆手鑑。国宝に指定されており、古筆切の他に、書状や懐紙など通常の古筆手鑑には見られないような作品が多く収められている。江戸時代に近衛家熙(1667—1736)によって制作されたもので、収められている古筆の質の高さと、点数の多さから『大手鑑』と呼ばれている。個々の古筆には、家熙による鑑定札が付けられている。また、帖の各所に古筆を貼り込んだ跡と見られる糊跡が確認できることから、現在の形になるまで、何度も所収する古筆を貼り替えながら、家熙が手鑑を仕立てていった過程を窺うことができる。上帖の巻頭に、伝聖武天皇筆『賢愚経』断簡(大和切・奈良時代)を収める。一般に「大聖武」と通称される古筆切の名品で、古筆手鑑の巻頭に貼り込むことが通例となっている。下帖には、平安時代の仮名名筆が多くおさめられており、伝藤原佐理筆『人麿集』断簡(室町切・平安時代)や、伝藤原行成筆『和漢朗詠集』断簡(法輪寺切・平安時代)などが名品として知られる。また、各古筆切の周囲には、金欄などの裂や様々な色の唐紙などを用いて、家熙の好みによる表装を施している。これは、個々の古筆切の鑑賞性を高めるとともに、古筆切を貼りかえる際に本紙の部分を保護する役割も果たしている。

『古今和歌集』 冷泉為相筆

鎌倉時代の歌人で、冷泉家の祖となった冷泉為相(1263

—1328)筆の『古今和歌集』上下2帖。重要文化財に指定されている。下帖に記載の奥書には、冷泉為相が相伝の定家自筆本(嘉禄二年本、冷泉家時雨亭文庫に現存)をもとに嘉元3年(1305年)4月に転写した旨が明記されており、「散位為相(花押)」の署名も確認できる。また、表紙には、金銀箔と緑青を用いた装飾料紙が用いられており、古い典籍の装丁としても貴重な遺例である。室町時代の公家、三条西公条(1487—1563)の折紙が附属しており、これによると天文10年(1541年)以前は「高屋金幢」という人物が所持していたことが知られる。

『詠糸桜和歌巻』 孝明天皇筆

江戸時代最後の天皇として知られる孝明天皇(1831—1867)による自詠自筆の和歌巻。『詠糸桜和歌巻』の名称の通り、近衛邸の糸桜を詠んだ御製和歌31首を、金泥で糸桜の下絵を描いた料紙に染筆したもので、重要文化財に指定されている。近衛邸の糸桜は古来より有名で、現在も京都御苑内の旧近衛邸跡に植えられている。安政2年(1855年)、近衛邸に行幸した孝明天皇は、邸内の糸桜を愛でる花見の宴に臨み、還幸後に当日の感興を自詠の和歌に認め、近衛忠熙(1808—1898)へ礼状に添えて下賜している。現在の和歌巻は、忠熙が改めて清書用の装飾料紙を献上し、孝明天皇が御製和歌を清書したものと推測されている。和歌には詠作事情を示す詞書も添えられており、当日行われた花見の宴の様子を具体的に知ることができる。江戸時代の皇室と近衛家のつながりを示す資料としても重要なものである。

なお、こうした文学研究の重要な資料を数多く所蔵し、一千年にわたり守り伝えた近衛家とはいかなる家であるかについて、歴代当主の文芸活動を示す和歌懐紙や、近世の近衛家と皇室との関わりを示す宸翰(歴代天皇の筆跡)なども併せて展示する予定である。さらに、近衛家伝来の名宝として有名な古筆の名品も多く展示することで、近衛家という家を核として伝えられた王朝和歌文化の世界を実感していただきたい。

※本稿で紹介した作品は、文化財保護による展示替えのため、それぞれ展示期間が異なります。展示期間の詳細は、決定次第、当館Webページに掲載しますのでご確認ください。

(<http://www.nijl.ac.jp/>)

展示会・関連行事開催情報

特別展示「近衛家陽明文庫 王朝和歌文化一千年の伝承」

開催日時：平成23年10月8日(土)～12月4日(日)

開催場所：国文学研究資料館 1階展示室

開催時間：10:00～16:30

休室日：月曜日(予定)

特別鑑賞料：300円

事前講演会

陽明文庫展の開催を前に、一足早く陽明文庫長である名和修氏による講演会を開催します。

日程：平成23年9月19日(月・祝) 14:00から16:30

場所：東京ウィメンズプラザ 東京都渋谷区神宮前5-53-67

※事前申込制

申込方法等については、決定次第、当館Webページ(<http://www.nijl.ac.jp/>)に掲載いたしますので、ご確認下さい。

平成23年度連続講演

日本文学研究の成果の普及を図るため、古典文学の中で主要な作家、作品やテーマを選び、第一線で活躍している研究者による5回連続の講演会を開催しています。

平成23年度は名和修氏(陽明文庫長)を講師にお迎えし、以下の日程と題目で開催する予定です。

テーマ：「古典資料の創造と伝承」

第1回 10月14日(金) 「近衛家陽明文庫の名宝」

第2回 10月28日(金) 「御堂関白記(1)」

第3回 11月11日(金) 「御堂関白記(2)」

第4回 11月18日(金) 「歌合(1)」

第5回 12月2日(金) 「歌合(2)」

※事前申込制

申込方法等については、決定次第、当館Webページ(<http://www.nijl.ac.jp/>)に掲載いたしますので、ご確認下さい。

国文学研究資料館蔵『沙石集』大永三年写本について

落合 博志 (国文学研究資料館准教授)

国文学研究資料館は、平成 21 年度に『沙石集』の写本を購入した。これまで学界に知られていなかった新出の伝本であり、ここに特徴などを紹介してみたい。

初めに書誌を簡単に記しておけば、縦 27.0 × 横 20.0cm 前後の袋綴本 3 冊で、第六・七・九の 3 巻を存する。各冊に「砂石集第六(七・九)」の内題・尾題があり、また各冊の表紙に「砂石集第六(七・九)」の外題(本文と別筆)、及びそれと同筆の「水登之」の署名がある(図 1)。漢字片仮名交じりで毎半葉 10 行に書かれ(図 2)、各冊末に次の奥書がある(図 3)。

(第六) 大永三年五月九日書写畢後見人阿字一返

(第七) 大永三年五月十三日書之畢当用之儘悪筆無面目候へトモ一ハ菩提心之思儀^ヲ二ニハ当寺奥未之故仁人間イトツテ心静ニシテ然間閉^レ口^ヲ走^レノ筆^ヲ功能不^レ失^レ筆行ノ威力有テ無辺生死ヲ離レ仏性円明之位ニ令至^ヲ玉へ^レ後見之人不便ニ思召^ニ(梵字ア)字一返ニテ可然候^ノ古哥 カキヨクモソテコソヌ^レレモシヨクサイツカムカシノアト、イハレン

(第九) 大永三年六月十一日書写畢御覧人ノ念仏一返

この大永三年の奥書は書写奥書と認められる。第七の奥書によると書写者はいずこかの寺僧らしいが(文言から推してあるいは真言宗の僧か)、具体的には不明である。また、後の所持者の「水登」についても知り得ない。

『沙石集』は、中世の説話集の中でもとりわけ伝本によ

る本文の異同が大きいことで知られる。諸本の系統については、説話の出入り等により大きく二系統に分け、それぞれの内部を調巻の相違によって区分する、次のような分類案が提示されている(新編日本古典文学全集解説ほか)。

- 古本系 第一類十二帖本(俊海本・米沢本〔新編日本古典文学全集の底本〕・元応本・藤井本)
- 第二類十帖本(梵舜本〔日本古典文学大系の底本〕・内閣一類本・成實堂本ほか)
- 流布本系 第三類十帖本(長享本・東大国語本・神宮本・岩瀬本・内閣二類本・刊本ほか)
- 第四類五帖本(中央大本・仏法寺本)

この分類に照らすと、新出の大永三年写本(以下大永本と呼ぶ)の第七・第九は古本系と考えられる。古本系伝本のうち巻七を有する俊海本・米沢本・元応本・梵舜本と比較すると(成實堂本未見)、大永本の第七は俊海本と米沢本・元応本の中間的性格を持つ。第九については俊海本が伝存しないため位置付けが難しいが、やはり同じような性格かと推測される。いずれにせよ、両巻とも従来知られている諸本とは異なる本文を持つ写本として注目される。

一方第六については問題がやや複雑なので、まず内容を掲出してみたい。説話標題には 1~12 の番号を付し、裏書は順に a~1 として冒頭部分を引く。裏書のうち他本の本文や裏書に見られるものは【 】内に注記する(流=流布本系、梵=梵舜本。なお第 1 項を「1」と表記し、項目内に説話が複数ある場合は順に①②…で示す)。



図 1 第九表紙



図 2 第六の一部(1~裏書 a)

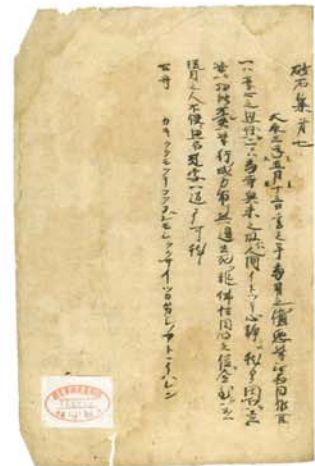


図 3 第七奥書

1 説法師之強盜令発心事

- ◎ (裏書a) 裏書云備中国ニ海賊ノ帳本有ケリ
- (裏書b) 又云恵心ノ往生要集云 【(前半) 流1】
- ◎ (裏書c) 又云善導ノ釈ノ立(意)口
- (裏書d) 又云主(圭)峯禪師云 【(冒頭) 流1】

2 強盜門(問)法門事

3 静遍僧都ノ説法ノ事

4 聖覚法印之施主分事

- ◎ (裏書e) 裏書云神明仏陀ノ罰ト云事ハ

5 栄朝上人之説成事

- ◎ (裏書f) 裏書云山臥役行者是レ根本師トシテ
- (裏書g) 又云清水ニ八講ヲ行事有リケリ 【梵7】
- (裏書h) 又云六角堂炎上ノ事有テ 【梵8①】
- (裏書i) 又云出州ニ迎講行ケルモ 【梵8②】
- (裏書j) 又云上総国ニ寛喜年中ノ飢渴ニ 【梵8③】

6 能説房説法事

- (裏書k) 裏書云真言念仏禪門等ノ行業ノ 【流6】

7 有所得之説法事

- * 8 説法セスシテ布施取りタル事 [梵13①②]
- (米・元は目録のみにあり、本文なし)
- * 9 説法ノ言ノイヤシキ事 [(前半) 米3・元3・梵3①]
- * 10 施主分事 [米5・元5・梵6]
- * 11 長説法事 [米4・元4・梵5]

12 袈裟得事

- (裏書l) 裏書云心地観経云袈裟ハ即是レ
- 【(前半) 成實堂本裏書】

このうち*を付した8～11以外の各項は、項目とその配列及び本文系統から、流布本系に属すると考えられる。注目されるのは計12条を数える裏書で、◎または○を付したa・bの後半・c・dの大部分・e・f・lの後半は、従来知られている諸本には見えないものである。

また裏書g～jは、上に示したように梵舜本特有とされてきた話の一部と重なっている。いずれも卑俗な話材で、梵舜本草稿の性格説の根拠の一つとされてきたものである。しかし改編の方向として、当初裏書であったものを本文に採用した可能性が高く、その逆は考えにくい。梵舜本巻六は、恐らく大永本のような裏書を持つ写本を参照して、

説話を増補したのであろう。梵舜本については近年、かつての初期稿説を修正する見解が諸氏によって示されており、その問題に関しても一石を投ずることになろう。

一方8～11は、流布本系になく古本系に存する項目である([])内に古本系諸本の収載状況を示した。なお米＝米沢本、元＝元応本)。これらは目録にはないものの、他の項目と同じく説話標題が備わっており、内容的・形式的に独立の項目でありながら、文章の冒頭に「裏書云」(11は末尾に「已上裏書」と記されている。しかし1・4等の裏書のように、本文との対応関係(例えばbは「無益雑談ニ日ヲクラスト云フ処」とある)は指示されていない。

この四項のみ系統を異にすることと、目録に欠けていることを考慮すると、恐らく8～11は古本系の一本から収録されたもので、その際本来の内容とは別のものであることから、「裏書云」等と注記したのであろう。従って、「裏書」とはいつでも卷子本や折本の紙背に書かれた記事の謂ではなく、追補的な記事を比喩的に言ったものと思われる。これらを増補したのは、7が教説のみの項目であることから、そこに言う「有所得之説法」(諸法実相を知らず無相の理を説かない説法や、名利を目的に行う説法)の具体例を示すためと推測される(11は主題的には7と離れるが、非難すべき説法の例として続けて収録したのであろう)。因みに古本系は、9～11などの悪しき説法の話の後に、かなり離れて7が置かれる形である。

なお9の後半(逆修の説法で布施欲しさから咄嗟に地獄の苦を説いた僧の話)は諸本に見えない内容であるが、『沙石集』の抜書である岡崎市満性寺蔵『見聞聚因抄』第四には前半に続けて収録されている。また、他本が「常州ニ観地坊阿闍梨」とする11の主人公の名を「宇治法師」とする点も大永本と一致し、8～11に相当する説話の配列も大永本と同じである。ここから、8～11の増補に用いられたのは『見聞聚因抄』が基づいた本に近いものだったことが推測される。現存が確認されないものの、かつてはこの系統の本もある程度流布していたのであろう。

更に諸本と比較しつつ精細な分析を行う必要があるが、『沙石集』の研究において様々な問題を提起する写本として、今後の活用が期待される。

「幻住庵記」を考える

井田 太郎 (国文学研究資料館助教)

一 『猿蓑』巻六の一部としての「幻住庵記」

芭蕉(一六四四—一九四)の「幻住庵記」は千四百余字。元禄三年四月六日より七月二十三日まで、近江国の幻住庵に滞在したおりの俳文である。稿本はA 最初期草案断簡、B 初期草案、C 初稿、D 再稿草案断簡、E 再稿一・二、F 定稿一・二・三の六系統九種あり、彫心鏤骨が知られる¹。「幻住庵記」を収める『猿蓑』(元禄四年刊)の巻六は、『猿蓑文集』という頓挫した俳文集のなごりと考えられている。巻六は、① 幻住庵記・② 題芭蕉翁国分山幻住庵記之後・③ 几右日記で構成され、俳文・漢詩文・発句の並列という形式をとる。同一書で俳文に跋が付いている類例は、管見のかぎりない。②・③を付ける奇妙な構成をとった理由、形式的由来はなにか。巻六をトータルで読もうとする方向では一連の先行研究がある²が、この疑問には答えてくれない。②については、心情吐露を含む①の景観的な側面にばかり触れているという当惑した同氏の評価が備わる³が、①・②・③を一体としてみると、『猿蓑』巻六は賛のある山水画のようにも感じられる。①をことばによる山水画、②・③をその賛とみるわけである。こういった観点を作業仮説や徴候として導入すると、新たになにが展望できるのか。

二 「幻住庵記」の山水画的要素、『猿蓑』巻六の形式とヴィジュアルなもの

最初に結論めいたことから述べると、①には〈和〉・〈漢〉を想起させる景物で構成された二つの主題がぼんやりあり、これらがもつれ、展開しながら、最終部で「賢愚文質のひとしからざるも、いづれか幻の栖ならずやと、おもひ捨てふしぬ」と〈和〉・〈漢〉の主題が解決される一文であると筆者は考えている。

①の半分以上は景観描写に費やされている。①が伝統的な庵記の書式に則っているという先学の指摘は承知であるが、構成要素として名所・山水・人物が配置される点から、展開の少ない掛物としての山水画より、展開していくような山水画卷が彷彿とされる。視覚的イメージに富む詩を有声画というが、①は俳文ながら有声画のような側面も持っている。

ここで①と②の関係を考察してみたい。②は向井震軒による漢詩文。震軒は去来の兄で、芭蕉は①の推敲を問い合わせた。②が①の景観的な側面にばかり触れているという評価を逆にみれば、②が①に山水画的要素を看取した微証ではないか。そう捉え直すと、俳文の①に対して賛のような②・③が存在し、一巻をなす特異な構成も実は理解しやすい。室町時代以来の〈和〉の山水画を思うと、画に賛を伴うものは応永詩画軸など少なからずあるからである。これらは元末明初の〈漢〉の流行を受け、禅林を中心に制作されたものであるが、応永詩画軸を代表する「柴門新月図」(応永十二年、藤田美術館蔵)をみると、禅僧十九人による序・詩が書かれている。このように山水図・書斎図・送別図に多人数で画面の上部に著賛する形態は〈和〉でもすでに存在していた。約三世紀を隔てた芭蕉とて〈漢〉の詩文を通し、題画詩の存在は知っていたと考えられる。北宋において題画詩は爆発的に増加したという報告がある⁴が、芭蕉はその北宋の詩人黄山谷・蘇東坡の詩に親炙。彼等の詩集をみても、山水図ではないが、文同の竹図に東坡、東坡の枯木竹石図に山谷、李公麟の馬図に東坡・山谷が題画詩・題跋を書いた例など枚挙にいとまがない⁵。広く読まれた『三体詩』なども題画詩を多く収める。題画詩や題跋を含む題画文学は認識されていたとしても、ことばのみで画を伴わず、具体的な像を結びにくい。

では、応永詩画軸を直接参照したのか。そこに記される題跋や題画詩もまた山谷・東坡の詩をよく咀嚼したものである。芭蕉は山水画の大家雪舟に触れてはいるが、実生活での大名との接触は磐城平藩の内藤家のみ。それも軽微な関わりで、大名の秘庫中の名画を目にした可能性は極めて低い⁶。寺院の所蔵品も難しい。どの程度の品質の肉筆画に触れたかも謎である。震軒は宮中にも伺候した儒医だが、実見した画が解明できないのは同様の状況にある。

しかしながら、②は①を「風景依稀入誹城」と誉めている。題跋・題詩をつける対象を称える表現として、玉潤の「無辺刹境入毫端」(「遠浦帰帆図」賛)などを想起させる。中国の僧侶画家玉潤は日本では詩人としても認知されていた⁷。たしかに玉潤のこの賛は、『詞林意行集』とおなじ宮川一翠子による『瀟湘八景詩歌鈔』(貞享五年

刊)、『絵本宝鑑』(貞享五年刊)に載る。「無辺刹境入毫端」は限りなく広い世界が筆先で描きだされているという意味で、あなたの筆力で「風景」がそのまま「誹城」に入っていると称揚する②と似ている。これは牽強付会にしても、『瀟湘八景詩歌鈔』(国文学研究資料館蔵、挿図1・2)・『絵本宝鑑』という版本は、まがりなりにも「瀟湘八景図」を掲載している。『猿蓑』成立の少し前に、こういった詩画軸を彷彿とさせる画に賛を伴う版面のものが出版物として流通していたことには注目すべきである。①・②・③という特異な形式を考える際、肉筆画より披見しやすいこれらの存在は、視覚的な要素の流入や形式面での波及を考えさせるからだ。

つまり、近江八景的な要素ももっている①を画に擬すれば、②・③は画と同一平面にある賛に相当することになって、これらの出版物の視覚的形式と相似形を描く。②の使う「風景」・「美景」が本来的に山水美をいう語彙に属する⁸こともこの見解を補強するだろう。しかも、室町時代以来の日本の山水画の賛では、描かれた山水美を主として称えるのが通例であった。なんらかの肉筆画をみて発想した可能性も払拭しきれないが、出版物というヴィジュアルな媒体を通し、詩画軸と類似するものをことばで組み立て、結果として詩画軸に似ている可能性が指摘できる。画と賛というかたちとことばによる形式を、『猿蓑』巻六では俳文・漢詩文・発句ということばのみの形式に置き替えた。その点に俳文集を編めなかったがゆえに『猿蓑』巻六で凝らした趣向、面白さや遊戯性を積極的に認めることができるのではなかろうか。

こうした高度な趣向を練ったのは芭蕉の高弟で、『猿蓑』序文を書き、巻頭でも重い扱いを受けた其角(一六六一—一七〇七)であったかもしれない。

三 開かれた構造から閉じられた構造へ

本来①は『猿蓑』巻六の一部だったが、『風俗文選』(宝永三年刊)・『和漢文操』(享保十二年刊)など俳文集に取り込まれ、単独で読まれる機会が増えていった。その結果、②・③との有機的関連が解かれ、同時に芭蕉という〈芸術家〉個人の思念の解明を究極目標に据える近現

代の研究傾向も相俟って、画と賛の関係に通じるコラボレーションの側面、座の妙味がみえにくくなったことは否めない。これに併せ、B・Cにもあった『笈の小文』の有名な一節を主たる媒介項とし、昭和十年(一九三五)前後以降、芭蕉は日本の精神史の〈伝統〉の中枢の流れに位置付けられ、遊樂的イメージの漂いがちな江戸時代における孤高の〈芸術家〉として扱われてきた研究史の経緯もある⁹。その経緯を確認して、再び読みに立ち返る必要があると筆者は考えている。



挿図 1



挿図 2

- 白石悌三「幻住庵記の諸本」(白石悌三・上野洋三校注『芭蕉七部集』、岩波書店、一九九〇)参照。本稿では白石氏の稿本群の分類を使用し、各段階の稿本群をアルファベット大の文字で略称。さらに区別したい場合は、E再稿などと示す。①とのみあるのはF定稿三を指す。
- 佐藤勝明「『猿蓑』漢詩文考」(『和洋国文研究』三一、一九九六)・「『猿蓑』[凡右日記考](上・中・下)」(『和洋国文研究』三二—三四、一九九七—一九九九)参照。
- 佐藤勝明「『猿蓑』漢詩文考」参照。
- 衣若芬「觀看・叙述・審美 唐宋題画文学論集」(中央研究院中国文哲研究所、二〇〇四)九二頁。
- 島田修二郎「詩書画三絶」(『中国絵画史研究』、中央公論美術出版、一九九三)参照。
- 芭蕉より後年、業俳前田春來は熊本藩主細川家に出入りし、今日では伝雪舟とされる詹仲和賛「富士三保清見寺図」(永青文庫蔵)を「東風流」(宝暦六年刊)で句作。しかし、実見はさせてもらっていない。
- 堀川貴司「瀟湘八景」(臨川書店、二〇〇二)参照。
- 斎藤希史「『風景』」(『興膳教授退官記念中国文学論集』、汲古書院、二〇〇〇)参照。
- 拙稿「〈帝国〉のほそ道」(『国文学解釈と教材の研究』五二—一四、二〇〇七)参照。

尼僧をめぐる物語絵の諸相

恋田 知子 (国文学研究資料館機関研究員)

これまで文学研究において、尼僧といえば、熊野比丘尼のような勸進目的に語り歩いた廻国の尼を取り上げるのが大半であった。だがその一方、中世後期に天皇家や貴族、將軍家の女性が入寺し、宮中や貴族社会と密接に関わりながら信仰生活を送った比丘尼御所の尼も見過ごせない。

室町期を中心とした物語や説話、法語について調査研究を進めていくなかで、それらの享受や所持、制作要請者として比丘尼御所の尼の姿が浮上してきた。公家や將軍家、寺家やその周辺に存した書物や伝承などが行き交う場である比丘尼御所は、いわば室町期の文芸サロンと位置づけられる。

宮中や貴族の文芸活動とかかわりを持ち続けた比丘尼御所は、当時の文芸文化の極めて重要な拠点であったとする「比丘尼御所文芸論」を端緒とし、その対象を尼寺全体に広げ、中近世の文芸・文化にもたらした意義を再検討するため、具体的な事例を積み重ねている*1。

『唐糸草紙』における「松が岡殿」

このように、尼僧や彼女たちがつどう場と物語とのかかわりについて研究を進めてきたのだが、そもそも、物語草子をめぐる尼僧の問題に強い関心を抱ききかけとなった作品に、渋川版御伽草子二十三編の一つ『唐糸草紙』がある*2。

頼朝の命を狙い、捕らわれた唐糸を、娘の万寿が鶴が岡で舞を舞い、八幡の靈験と舞徳によって救い出す、芸能成功の物語である。こうした母娘二代にわたる物語には、『平家物語』巻一の刀自と祇王や『義経記』巻六の磯禪師と静など、女性芸能者の物語における親子関係の反映がみてとれる。とくに、初めは頼朝の前での芸の披露を拒むが、乳母に促されて舞を舞い、母の釈放と恩賞を得た万寿には、母の説得によって最終的

に頼朝の前に舞った静の姿に重なるものがあり、女系の芸能成功譚としての共通構造が認められる。

そんな女性の活躍を描く『唐糸草紙』のなかでも一際異彩を放つのが、暗殺計画の露見した唐糸を保護し、頼朝にもひるまず、唐糸を保護する尼僧「松が岡殿」である。唐糸が一時預かりの身となった松が岡とは、鎌倉の臨濟宗円覚寺派東慶寺を指す。弘安8年(1285)、北条時宗の妻覚山尼の開山で、室町期には後醍醐天皇の皇女用堂尼や足利氏の女性が代々住持を務めたことから、松が岡御所と称せられた。近世には、俗に縁切寺、駆込寺とも呼ばれ、上州の満徳寺とともに、多くの女性を救済した。

物語中の松が岡殿は開山覚山尼を指すと考えられるが、頼朝の時代からはかなり下っており、物語の時代設定上、齟齬をきたす。だが、唐糸に対する松が岡殿の描写には、女性の保護者としての面が強調されており、いかなる権力者であっても介入できない当寺のアジールとしての側面を映し出す。時代的な矛盾を犯してまで松が岡殿を登場させたのは、物語の舞台が鎌倉の地であることを際立たせるとともに、物語の成立当時の東慶寺の状況を少なからず反映したことによるものであろう。

国文学研究資料館蔵『からいと』の挿絵

ところで、渋川版で広く知られる『唐糸草紙』だが、意外にも写本は少なく、優美な筆致の挿絵が付された当館蔵奈良絵本『からいと』は貴重である。現存諸本については、慶長頃古活字十行絵入本(内閣文庫蔵)と寛永頃刊古活字十一行絵入本(無窮会蔵)の二系統に大別され、松会版、渋川版など整版本も知られるが、古活字版を遡る伝本は報告されていない。写本

についても、当館蔵奈良絵本をはじめ、早稲田大学図書館、大英図書館の絵巻が知られるが、いずれも古活字本を遡るとは言い難く、早くとも江戸初期の写しと推察される*3。

当館蔵『からいと』は、紺地表紙および朱題簽に金泥草木を描き、金泥草木の下絵入りの鳥の子紙を用いた華麗な装丁の特大奈良絵本で、江戸前期の嫁入り本と推察される。本文については、内閣文庫本以下の江戸初期丹緑本系統に位置づけられ、住吉派風とされる挿絵も、古活字および整版本の図様に類似する。だが、上下冊各6図計12図からなる挿絵のうち、1図だけ版本とは異なる図柄が認められ、注目される(図1参照)。



図1 当館蔵『からいと』上冊9丁裏

図1は、松が岡殿の計らいで故郷信濃に逃れようとした唐糸が梶原景時に捕らえられ、頼朝のもとに連れ戻される場面に位置する。版本では、いずれも捕らえようとする景時と唐糸とを対峙させる構図となっているのに対し、図1だけが画面左下の馬上に景時と思しき武士を描き、網代輿とともに馬に乗って鎌倉へ連れ戻される唐糸を描くのである。その装いも白衣に小袖の打掛をまとい、塗笠に白頭巾を垂らした旅姿で、物語絵に見られる在家尼の姿をも想起させる。現存諸本では総じて、御伽草子の女房姿の定番である大垂髪に小桂姿の唐糸が描かれており、隔たりがみてとれる。この唐糸の装いについては、古活字版と同じ構図の入牢場面(図2参照)でも、白頭巾はないものの白衣に同じ小袖の打掛姿で描かれており、当館蔵本のみが一貫して描く独自の唐糸像といえる。



図2 当館蔵『からいと』上册11丁表

それにしても、全12図のうち11図はいずれも版本と同構図の挿絵である当館蔵本において、なぜ図1のみ異なる構図となったのか。また、版本と同姿の万寿に対し、一貫して版本とは異なる唐糸像を描くのはなぜなのか。それらを探る手がかりが同じ当館蔵の奈良絵本『しつか』の挿絵にある*4。

当館蔵『しつか』との共通性

歌舞芸能を軸に母娘二代の物語をなす『唐糸草紙』は、前述のように磯禪師と静の物語を彷彿とさせる。なかでも幸若舞曲「静」は物語の構造上、多くの共通点をみせる。読み物としても普及した舞曲「静」は多くの奈良絵本・絵巻が制作され、室町末頃の古写本も伝存する。そんな「静」の奈良絵本の一つで、大頭流の本文を有し、江戸前期写とされるのが当館蔵『しつか』である。その装丁は、紺地表紙と朱題簽に金泥草木を描き、金泥草木下絵入り鳥の子紙を用いた華麗な特大奈良絵本で、先の当館蔵『からいと』の装丁に近似する。さらに、本文の筆跡および挿絵の色遣いから樹木や人物の描き方、衣の模様といったまで極似し、同工房で制作された同筆の奈良絵本と推定される。そこでの静の母磯禪師の装いは、図1でみた唐糸のそれによく似るのである(図3参照)。



図3 当館蔵『しつか』下册2丁表

図3は、義経との別離後、梶原景時に捕らえられた静が頼朝により胎内探しを命じられるものの、母の禪師が政子に嘆願したことで救われる場面であり、中央に喜ぶ磯禪師の姿が描かれる。その装いは白頭巾で髪を覆い、白衣に小袖の打掛の姿である。図1の唐糸と打掛の色こそ違え、唐草梅紋の模様まで類似する。登場全人物それぞれの衣の模様を細かく描き分ける当該奈良絵本の特徴から、二人の模様が一致することは重要である。そこには頼朝の前で舞った万寿と静の物語としての重なりと同様に、母である唐糸に磯禪師の姿を重ねて描こうとした絵師の趣向がほの見える。同工房で仕立てられたとおぼしき奈良絵本における図像イメージの転用の様相もうかがい知れよう。

同じく、京の浄土寺に隠れ潜んでいた静が、密告により景時に捕らえられる図4も注目される。



図4 当館蔵『しつか』上册6丁表

図4は、景時に居所を知られた静が母の勧めで出家の許しを乞うものの許されず、剃刀を額にあて有髪のまま受戒する場面に位置する。聖により説話を交えて長々と語られる五戒の講説は、幸若舞曲「静」独自の記事であり、奈良絵本諸本では完全に削除する伝本もあるなか、当館蔵本は略さず記す。にもかかわらず、挿絵では、諸本に共通して見られる聖による授戒場面ではなく、図1で見た唐糸の鎌倉下向と同様の網代輿を描き、その脇で涙に暮れる静や禪師、浄土寺の尼たちが描かれ、尼たちとの交流を強調する挿絵となっている。そこには、尼たちと浄土寺に隠れていたことが景時に露見し、頼朝のもとに連行される静お

よび磯禪師の姿と、松が岡殿による計らいが景時に露見し、頼朝のもとに連行される唐糸の姿とを重ねる趣向がみてとれる。

このように、当館蔵『からいと』において、図1のみ版本とは異なる構図が描かれた背景には、同筆の奈良絵本当館蔵『しつか』との影響関係が想定される*5。物語の相似性に起因する図像イメージの共有が計られたものと考えられよう。

翻って、図1は、物語成立時における寺の状況の反映をも想定させる「松が岡」をめぐる引き起こされた、物語の契機となる場面に位置する図像でもあった。その意味で、版本で対峙していた景時を脇へと追いやり、在家尼をも想起させる唐糸の姿を中心に据えた構図は極めて象徴的といえる。すなわち、図1にみる唐糸の姿は、磯禪師との重なりと同時に、頼朝でさえも手出し出来ない、女性を保護する「松が岡」の尼僧イメージをも映じているのではないかと。

物語中の芸能者や宗教者といった女性を前面に描いた当館蔵『からいと』『しつか』は、嫁入り本として、当時の女性たちの目を楽しませていたに違いない。

【注】

- *1 拙稿「尼寺と絵巻—真盛上人伝の一型—」(『説話文学研究』43号、2008)、拙編『薄雲御所慈愛院門跡所蔵 大織冠絵巻』(勉誠出版 2010)など、現存尼門跡や尼寺の物語絵についても研究を進めている。
- *2 拙稿『唐糸草紙』考(『仏と女の室町』笠間書院 2008)。
- *3 当館蔵『からいと』については、当館ホームページ「新・奈良絵本データベース」にて全冊閲覧可能である。また、早稲田大学、大英図書館蔵絵巻についても、それぞれ早稲田大学図書館「古典籍総合データベース」、慶應義塾「世界のデジタル奈良絵本データベース」により、全巻閲覧可能である。
- *4 当館蔵『しつか』も『からいと』同様、「新・奈良絵本データベース」にて全冊閲覧可能である。
- *5 当館蔵『しつか』には見られないものの、京都大学図書館蔵の奈良絵巻『しつか』など現存奈良絵本には、景時と静の騎馬姿に網代輿という図1と同構図の挿絵が見られる(『京都大学蔵むらちものがたり』1(臨川書店)口絵参照)。物語絵の構図や挿絵転用の問題は複雑な交差を見せ、容易には判断し難く、今後とも考察を深めていきたい。

研究展示「近世の和歌御会二〇〇年—久世家文書くぜに見る公家の文事」

本館の研究プロジェクト・特定研究「久世家文書の総合的研究」（代表者 日下幸男（龍谷大学教授））に基づく研究展示「近世の和歌御会二〇〇年—久世家文書に見る公家の文事」は、平成 23 年 5 月 23 日から 6 月 24 日まで本館一階展示室を会場に開催されました。

本展示では、久世家に伝えられた諸資料から文事に関わる資料を選び、Ⅰ久世家文書の意義、Ⅱ近世の公家の文事、Ⅲ和歌の稽古と御会、Ⅳさまざまな歌会の四つのテーマに沿って展示し、江戸時代公家の和歌を中心とした文事の実態を概観しました。具体的には、当館所蔵の久世家歴代の日記（上記Ⅰのカテゴリー）、同詠草や短冊（同Ⅲ）、個人蔵久世家門人の添削詠草留（同Ⅲ）といった資料により、和歌を詠むための修練の実際を追い、次いで、宮廷歌会の中心であった禁裏御会を記録したおよそ二〇〇年間の詠草留（同Ⅲ）を時代順に並べ、長きにわたる歌会の伝統を体感的にも窺い知ることができるように配置しました。また、仙洞御会、歌道家主催の歌会、追善や法楽の歌会に関わる資料（同Ⅳ）を配し、和歌を中心とするさまざまな公家の文事について解説しました。展示期間中は、毎週金曜日にギャラリートーク（担当：中村健太郎、海野圭介）を行いました。和歌や伝統的儀礼への関心も高く、熱心な質問が多く寄せられました。

なお、5 月 26 日には本館の国文学文献資料調査員会議にあわせて「近世の公家文書と学芸」と題したシンポジウムを開催しました。日下氏による「久世家文書と古今伝授」の報告にはじまり、浅田徹氏（お茶の水女子大学教授）「堂上から地下へ—典籍の流出・提供・活用—」、西村慎太郎氏（当館准教授）「近世公家家職研究の展望と課題」の二つの論題の報告を経て活発な討議が行われました。（海野圭介）



国文学研究資料館 web サイトのリニューアル

当館 web サイト¹（トップページ <http://www.nijl.ac.jp/>）が、利用者にとって使い勝手がよく、国文学研究資料館にとって効果的な情報発信ができるサイトとなるよう、2011 年 4 月 13 日にリニューアルを行いました。主な変更点を以下に挙げます。

- (1) 建物内外の写真を紹介
- (2) トップページの「所蔵資料画像」をランダム表示
- (3) 各ページのデザインを統一
- (4) 各ページまで 3 クリック内で辿れる構造に
- (5) 各ページに「パンくずリスト」²を設置

(1) は、当館建物の雰囲気をお伝えしています。(2) は、トップページにアクセスするたびに、毎回違った画像をご覧いただけます。(3) は、メニューの位置や情報などに統一感を与え、サイト内でページ遷移しても基本的な使い方が変わらないよう操作性を向上させました。(4) は、目的のページに早く辿りつけるようにしました。トップページから深い階層にあるため、そのページに気づきにくいという状況をなくす効果もあります。(5) は、トップページから現在表示しているページまでの階層のリストによって、閲覧中のページが web サイト内でどの位置にあるかを表示します。

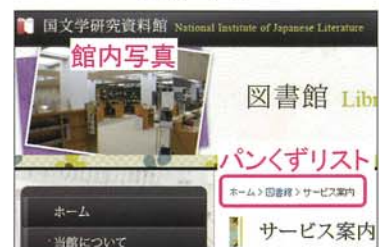
また、web サイトの改良や拡張を容易にするために、情報のカテゴリーごとにページを階層化して web サイトに配置する工夫も行いました。

web サイトの骨組み部分に当たる今回のリニューアルを活かすべく、web サイトの中身であるコンテンツの充実化と迅速な更新を意識しながら、利用者役に役立つ情報発信に努めてまいります。国文学研究資料館 web サイトを今後もよりよくしていくため、皆様からのご意見をお待ちしております。（古瀬蔵）

1：よく使われる「ホームページ」という用語は、本来、「Web ブラウザを起動したとき最初に表示されるページ」を意味するため、代わりに「web サイト」という用語を使っています。
2：童話「ヘンゼルとグレーテル」で、森の中で迷わないようにパンくずを落としながら歩いたという故事が由来です。



トップページ



図書館サービス案内ページ

第35回国際日本文学研究集会 The 35th International Conference on Japanese Literature

当館では、日本文学研究者による研究発表・講演・討議により、広い視野からの日本文学研究の進展を図り、研究者相互の国際交流を深めるため、国際日本文学研究集会を開催しています。

平成23年度は、以下のとおり開催します。

日 程 平成23年(2011年)11月26日(土)～27日(日)

テ ー マ 「〈場所〉の記憶—テキストと空間—」

文学テキストに刻み込まれた〈場所〉の意味に焦点を当て、日本文学及び日本を舞台とする文学のテキストと空間との関係を考えます。

主 催 大学共同利用機関法人人間文化研究機構 国文学研究資料館

会 場 国文学研究資料館

使用言語 日本語

参加要領 ●参加費：無料

●参加資格：文学に関心のある者(研究者・大学院生・学生・留学生など)

●申込み方法：①氏名 ②住所 ③現職 ④研究分野 ⑤レセプション参加希望の有無等を別紙「国際日本文学研究集会参加申込書」(当館Webページ<http://www.nijl.ac.jp/>からダウンロード可能)に記し、下記の申込先にE-mail・郵送・FAXのいずれかの方法でお送りください。

●申込み締切：平成23年(2011年)10月28日(金)

※当日受付も可能ですが、お申込みいただいた方には研究発表要旨集をお送りいたしますので、なるべく前もってお申込みください。

国文学研究資料館 国際日本文学研究集会事務局

〒190-0014 東京都立川市緑町10-3

TEL: 050-5533-2911 FAX: 042-526-8604 E-mail: icjl@nijl.ac.jp



平成22年度講演



平成22年度ポスターセッション

平成 23 年度サテライト講座

都心の会場で開催する、当館の教員が一般の方を対象として日本文学及び関連分野に関する話をする講座。毎回テーマを決めて、当館の研究成果をわかりやすくお話します。

平成 23 年度は、以下の日程で開催を予定しております。



平成22年度サテライト講座の様子

日時：平成23年11月19日(土) 場所：都内会場

テーマ：「近世芸能の世界(仮題)」

講師：武井 協三(国文学研究資料館副館長)
山下 則子(国文学研究資料館教授)

※事前申込制

詳細については決定次第、当館ホームページ(<http://www.nijl.ac.jp/>)にて情報を掲載しますので、ご覧下さい。

岩手県釜石市における被災文書の修復作業

4月26日、27日に高橋実教授、青木睦准教授、西村慎太郎准教授の3名が東北地方太平洋沖大地震で大きな被害を受けた岩手県釜石市に入り、被災調査を行いました。釜石市の行政文書は、地下にある書庫が天井まで水没し、大量の水損文書が発生しており、一部の文書を展開し乾燥させている状況でしたが、現地では、まだライフラインの復旧さえ十分ではなく、乾燥作業などを自立で行える状態ではありませんでした。

このことから、被災調査を行った教員が文書修復の方策について釜石市に提案を行ったところ、釜石市がこれを受け入れ、人間文化研究機構では、国文学研究資料館を中心とした連携研究「大規模災害における資料保存の総合的研究」(研究代表：西村慎太郎准教授)を立ち上げるとともに、文化庁が行っている文化財レスキューに「人間文化研究機構内チーム国文学研究資料館」(担当：青木睦准教授)として参加し、釜石市の文書修復作業を開始しました。

現在は、水損文書を釜石市第1中学校校舎に運搬し、乾燥作業及び汚れを取り除く作業を進めています。



水損した文書



修復作業

総合研究大学院大学日本文学研究専攻博士後期課程 入試説明会のご案内

平成23年10月22日(土)13時から当専攻の入試説明会を行います。

入試説明会では、専攻や入学試験についての説明の他、院生が利用する施設や、普段は入れない書庫の見学、特別講義の聴講等ができます。

事前申込みは不要ですので、興味がある方は、是非ご来館ください。

■平成23年度入試説明会プログラム

- 13:00～13:15 専攻についての説明
- 13:15～13:30 入試についての説明
- 13:30～13:50 総研大施設案内
- 14:00～14:20 図書館案内
- 14:20～14:50 現役院生との懇談
- 15:00～16:30 特別講義聴講
- 16:30～17:00 総合研究大学院大学担当教員研究室訪問

■平成24年度入学者募集

【概要】 課程：大学院博士後期課程

学 位：博士(文学)

募集人数：3名

研究体制：複数教員による教育・研究指導

(主任指導教員1名・副指導教員2名)

【願書受付期間】 平成23年12月2日(金)～12月8日(木)

【選考方法】 ・論文審査

・面接：平成24年2月1日(水)～2日(木)



入試説明会

8月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

9月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	

10月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

● 開館 9:00～18:00 ● 請求受付 9:30～12:00、13:00～17:00 ● 複写受付 9:30～16:00

ただし土曜開館日は、

● 開館 9:30～17:00 ● 請求受付 9:30～12:00、13:00～16:00 ● 複写受付 9:30～15:00

なお、夏期の節電対策のため、平日の開館時間の短縮と臨時休館を実施します。御了承下さい。

・開館時間短縮

7月1日～9月29日までの平日の開覧時間 9:30～17:30

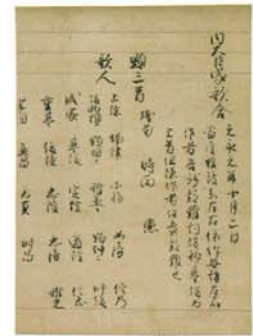
・臨時休館

8月15日(月)～8月17日(水)

表紙絵紹介

『類聚歌合／二十卷本』当館貴重書 99-133-1～2

江戸時代に古筆切として切断分割された『類聚歌合(二十卷本歌合)』断簡。書写内容は、図版右が『内大臣家歌合(元永元年十月二日)』(99-133-1)、図版左が『故右衛門督齊敏君達謎合』(99-133-2)の一部分である。2点とも平安時代の書写。『類聚歌合』は、複数の人物によって分担書写されているため、異なる筆跡が混在している。本来は、近衛家陽明文庫に所蔵する一連の『類聚歌合(二十卷本歌合)』の一部と推測される。分割前の本来の装丁は卷子装。古典籍を分割することについては、本文が切断され典籍として読むことができなくなる破壊行為と受け取られやすい。しかしながら、複数の断簡に分割したことで、一巻ごと火災などで失われる危険性を回避し、今日まで資料が残されたという面もあり、一概に否定すべきものではない。一葉でも多くの断簡を集積していけば、分割前の状態をある程度復元することが可能である。今後も新出の断簡の出現を大いに期待するものである。(中村健太郎)



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国文学研究資料館

〒190-0014 東京都立川市緑町10-3

Tel.050-5533-2910 Fax.042-526-8604

発行日 平成23年8月5日

編集 国文学研究資料館広報出版室

印刷 株式会社アズディップ

©人間文化研究機構国文学研究資料館